

北海道草地研究会創立20周年を祝う

日本草地学会 会長 大 泉 久 一

本日ここに北海道草地研究会創立20周年記念行事が挙行されることを心からお祝い申し上げます。日本草地学会は先般、京都に世界の代表を集め、第15回国際草地学会議を開催し成功裡に終了させることができました。これもひとえに、北海道の皆様の力強い支援があったからであり、感謝のほかありません。厚く御礼申し上げます。

日本の草地研究の歴史は未だそれほど深くはありませんが、この会議を通じて日本の草地研究が今日と未来の学問および技術の問題を話し会えるレベルにまで達していることが明らかとなりました。これは日本の草地研究にとっては勿論のこと、世界の草地研究にとっても重要な発展だと考えます。

日本の草地研究の母体は、何といても北海道です。本日のこの行事が行なわれること自体がそのしるしです。

草地は遊牧民の自然な土地利用から発足して、穀物給与のフィードロットに至る、広大な範囲の中で展開されてきた畜産物生産方式の基盤です。そして今日、地球の食糧生産の現状を見れば明らかな通り、緑の生態系の拡大再生産を計らなければなりません。草地は土地生産力の高さでは、直接生産の耕地には劣りますが、畜産物の需要が伸びつつける方向を見ますと、その土台となる飼料生産が、耕地と草地を結びつけ、組み合わせあって利用される姿を思わないわけにはまいりません。このような典型的な局面を北海道が狙ってゆくのではないのでしょうか。

北海道においては、土地利用型の草地基盤をもつ畜産が栄え、基本的な草地研究が行なわれてきました。そのことによって日本の畜産は世界の仲間入りができたのだと思いますし、日本の草地学界が国際会議を招くこともできたのだと思います。このように考えますと、北海道は草地研究の要です。つまりモンスーン地帯にある日本列島の独自の草生産を基にした、独自の飼料生産と広大な世界の草地農業、その生産性向上をつなぐかけ橋であります。

草地研究は北海道の殻を出て日本へ広がり、そして世界をひとつに見る視点で展開されなければならない学問です。北海道における草地研究の、更に一層の発展を願ってやみません。

20年の歴史という貴重な財産の上に、御列席の皆様がたの益々の活躍を祈念いたします。

北海道知事 横 路 孝 弘

北海道草地研究会の創立20周年を、心からお祝い申し上げます。

本研究会は昭和41年に設立されて以来、草地の開発方式や管理利用技術の確立、普及指導を通じて、本道の酪農・畜産の発展に大きく貢献されましたことは、本日表示された方々をはじめ、皆様方の御努力の賜物であり、心から敬意を表します。

本道の酪農・畜産は、今日乳肉用牛を合わせて100万頭を越えました。酪農では、飼養規模においてEC諸国の平均水準を上まわり、我国最大の生乳生産地帯として揺ぎない地位を占めております。し

かし、近年においては計画生産の実施や生産者価格の低迷、さらには諸外国の市場開放要求など、酪農・畜産をとりまく情勢は、誠に厳しいものがあります。幸い北海道は恵まれた土地資源があり、草地の利用を高めた、強い体質の経営を作り上げることが重要な課題であります。

道としても、草地開発整備をはじめとする振興施策を積極的に進めておりますが、さらに良質・低コストの飼料を生産することに努力して行かなければならないと考えております。

本日の創立 20 周年を契機として、本研究会がますます充実発展されますことと併せて、御列席の皆様御健勝を祈念して、お祝いの言葉といたします。

日本畜産学会北海道支部長 安井 勉

日本畜産学会北海道支部会を代表しまして北海道草地研究会創立 20 周年のお祝のことは述べます。私共が学生の時代も、畜産を専攻する学生は少なくありませんでした。その人達の中で牧草や餌に対して真剣に取り組もうとした時、どういう風に進めたらよいかは、道は非常に狭く厳しいものがあった訳で、或る者は畜産学会ではなくて作物学会に入会した方がよいのではないか、あるいは理学部の植物学教室で牧草の種の研究をした方がよいのではないかと深刻に悩む者もいた訳であります。私がグラスランドファーミングという言葉聞いたのは戦後でして、アメリカのカリキュラムの中にそういうものが立派に存在し、そして国際的に通用するし、いろいろなところで必要とされ、畜産学・作物学・土壌学を体系化して一つの実学と結びついた立派な学問体系になっていることが分かりました。先輩の方々御努力によりまして、非常に学際的な、しかも官民学が合同したアイデア提出の場として、この草地研究会がスタートし、しかも畜産・獣医の研究史 100 年の中で、もう 20 年という時間経過を経て、立派に本道に定着したことを心よりお喜び申し上げたいと思います。

北海道という非常に広大な土地を背景にもっているということで草地研究会が実際の面、すなわち農業の面において果たした役割は非常に大きいものがあったと思います。私達畜産学会道支部会を上廻るような会員数と、それから学問的なアクティビティを隆隆とお築きとお伺いし、大変喜んでいて次第でありますけれども、非常にダイナミックな研究会のこのダイナミズムという初心をお忘れなく、今後共発展されますよう祈念して、お祝のことはと致します。

北海道草地研究会創立20周年記念事業協賛会

会長 横田 長光

ここに北海道草地研究会創立 20 周年記念式典が挙行されることを、心からお祝い申し上げます。

貴研究会におかれましては、創立以来 20 年の長きに亘って北海道における草地畜産の振興に寄与するため、草地の開発及び利用等に関する学術的研究、さらにはその実践・普及などについて多大な貢献をされましたことに対し、衷心より敬意を表する次第でございます。

ご承知の通り、本道の酪農はその経営規模などの面において、概ね EC 諸国に匹敵するまで発展を遂げました。これは恵まれた土地基盤を背景とし、行政施策と農業者の弛まざる努力によるものであること

は論を待ちませんが、その陰に貴研究会の研究成果と、本日表示の栄に浴された方々の多年に亘るご苦労があったことを忘れてはならないと考え、関係者を代表し、改めて受賞された方々及び貴研究会各位に対し心からお礼を申し上げる次第でございます。

申し上げるまでもなく、本道は我国における動物蛋白食糧源の生産基地として重要な役割を担っております。しかしながら、その生産に当たる酪農・畜産情勢は、貿易の自由化など、内外共に一段と厳しさを増しており、これを乗り越え長期的且つ安定的にその役割を果たすためには、飼料基盤の整備等による低コスト経営を確立することが従来以上に重要な課題となって参りました。しかし、従来のような開発造成による外延的拡大は次第に困難な情勢にあり、今後は単位収量の増大、質の向上等、所謂内面的拡大への転換がより強く要求されるところでございます。先端技術の導入など、新しい時代を迎えてはおりますが、大自然の原点に立った基本的技術を忘れてはならないと考え、今後とも貴研究会における基本と先端との両相まった研究の推進と、その成果を心から期待して止まない次第でございます。

終わりに臨み、20周年記念事業にご賛同を賜りました関係各位のご理解とご好意に対し深く感謝の意を表しますと共に、貴研究会の益々のご発展を祈念いたし、粗辞でございますが、お礼とお祝いのご挨拶にかえさせて載きます。